

「チーム医療」における宗教者の役割

——キリスト教系病院のチャプレンの実践を事例に——

東洋大学大学院 鈴木梨里

1. 目的

一般的に医療という場合は、医師や看護師、薬剤師など国家資格を有する専門職で構成されている。治療やケアに対しては、医学的根拠のあるデータに基づいた実践と診療報酬制度の導入、マニュアル化や管理下により効率化を図ってきた。他方、がん患者の増加に伴い日本初の「緩和ケアチーム」が1992年に誕生以降、多職種が協働する「チーム医療」が臨床では重要視されている。細田(2012)は、「チーム医療」について医療従事者がどのように認識、実践しているのかについて調査し、専門性志向(専門分野の発揮)・患者志向(患者の問題解決中心)・職種構成志向(組織における複数の職種の存在と公式的地位)、協働志向(専門職による分業ではなく協業)の4つの志向を明らかにしている。近年、臨床においてスピリチュアルケアが注目され、従来から活動をしていた牧師や病院チャプレンに加え、臨床宗教師等が活動を広げつつある。しかし、スピリチュアルケアに関して一般の病院では、知識や理解、教育体制は十分ではなく、加えて宗教者の介入についても検討を要し、「チーム医療」において今後誰が担っていくのか課題は多い。そこで本発表では、早い時期からスピリチュアルケアを導入し、病院職員として常駐しているチャプレンの実践に注目し、「チーム医療」におけるチャプレンの位置づけを明らかにしたうえで、その宗教者の役割を析出する。

2. 方法

発表者は2016年から、東京都内にある院内病棟型のホスピスを有するキリスト教系病院にて、チャプレンへの聞き取り調査とチャプレン活動(礼拝)の参与観察を実施してきた。それらから得られたデータと病院誌、教団機関誌による文献調査を用いて考察を試みる。

3. 考察

本事例では、キリスト教の精神に基づいた事業理念を掲げているが、病院職員、患者共にクリスチャンの割合は1割程度である。主なチャプレン活動は、入院患者の訪問と記録、院内における礼拝、亡くなった患者への祈りや葬儀、病棟カンファレンスの参加等である。頻回な礼拝を通じて、ホスピス病棟の入院患者に限らず、幅広い患者に対して日常的に積極的な関わりをもっていた。多職者においてもそれらの活動は可視化され、医療者が介入することが困難な信仰的なケアや死後に関する事柄、散歩の付き添い等、宗教的な側面からそうではない側面まで、チャプレンに依頼をしていた。スピリチュアルケアにおいては、患者の「死にたい」という言動に対して、共に揺れながら継続的に寄り添う姿があった。医療者は患者の苦しみや不安に問題意識をもち、診断名と目標を掲げ介入するが、時として思い通りにケアができなかった場合には、不全感をもち続けることもある。「チーム医療」におけるチャプレンの課題としてあげられるのは、チーム内のメンバーも含めた職員のケアであろう。

4. 結論

「チーム医療」におけるチャプレンの実践は、寄り添いを通じたスピリチュアルケアや信仰的なケア、生前からの家族へのグリーフケアに限らず、他職者が手が回らない仕事のサポートなど横断的な連携であった。「チーム医療」において、宗教者は専門性のあるケアを提供する一方で、その独自性に対する多職者への理解と信頼を得ながら協働していくことが求められるといえる。

文献

細田満和子, 2012, 『「チーム医療」とは何か——医療とケアに生かす社会学からのアプローチ』日本看護協会出版会。